目白大学　総合科学研究
５号　2009年３月　81－92

目白学園高等学校交換留学制度を通して義務教育期間の家庭科教育を考える

A Report on Compulsory Home Economics Education
— Through the Student International Exchange Program at Mejiro Gakuen High School —

多田孝志　久保多賀子
（Tada Takashi　Kubo Takako）

Abstract :

The Student International Exchange Program at Mejiro Gakuen High School began in 1990. Since then, many students from our sister schools in Canada, Australia and New Zealand have studied at Mejiro Gakuen.

As a Home Economics teacher, I taught them lessons in Japanese cooking, traditional games and customs. They were very eager to know about "Japan". Through this experience, I realized that Japanese students don't know much about Japanese customs themselves. Recently, globalization in various fields in society has advanced rapidly. For Japanese students to take an active part in international society, it is necessary for them to know more about Japan and its customs.

For Japanese students to have better understanding of their own country, I believe that elementary school and junior high school curriculum should include lessons about Japanese customs and culture.

キーワード：交換留学、国際理解教育、日本文化、家庭科教育
Key Word：Student International Exchange Program, International Education, Japanese customs, Home Economics Education

はじめに

目白学園高等学校には20年程前から交換留学制度があり、姉妹校から毎年たくさんの留学生がやってくる。彼女らに日本独特の習慣や和食・遊びなどを教えるうちに、これからの国際社会の中で活躍する日本人を育成するためには、日本古来の文化や慣習を日本の小・中学生にも学校生活の中で伝えていくべきではないかとの思いに駆られるようになった。

１．目白学園高等学校の交換留学制度について

（１）　交換留学制度の歴史

目白学園中学校・高等学校の交換留学制度は、平成元年（1989年）カナダの３校（West Vancouver Secondary School, Collingwood School, St Michaels University School）と姉妹校提携が決定したことに始まり、翌平成２年（1990年）から生徒の交換留学と教員の相互交換が実施された。（その他、長期休暇中の語学研修も実施されている。）(1)

ただたかし：外国学部日本語学科教授
くぼたかこ：目白学園中学校・高等学校教諭

その後、姉妹校・提携校は４カ国（カナダ・オーストラリア・ニュージーランド・イギリス）17校（表１）に増えた。これらの姉妹校・提携校選定に当たっては、佐藤弘毅理事長が自ら現地に赴かれ、先方の校長や教育関係者などの責任者と面談し、互いの教育内容を確認した上で行われている。[2] 今年度末までには海外から受け入れた生徒が182名、送り出した生徒が246名になる予定である。（表２）

近年の傾向として交換留学生の数が、受け入れ・送り出し双方とも減少してきていることが懸念される。後藤・森本（2007）[3] によると、各国の教育システムの変化が大きく影響しており、留学すると10週間のプログラムでも教科学習の遅れを心配する生徒が増加しているとの報告がある。母国からの宿題を持参する者や、通信教育の形をとって留学生活を送る者もいたそうである。目白学園高校の生徒の中でも、大学受験意識の高揚・共働きの増加や介護の問題・経済の変化などで十分な体制が整えられないことが生じているようである。

（２） 本校の交換留学制度と国際交流教育

交換留学が始められた平成２年に、中学校・高等学校の校務分掌として「国際教育部」が設立され、交換留学や国際交流に関する業務を一括して行うことになった。

① 派遣の方法　本校からの交換留学制度の対象者は高校１・２年生で希望制であるが、選抜試験や事前のオリエンテーションで目的意識の確認やスキルの向上を含め、異文化理解のための学習（日本文化・歴史、海外事情など）を行っている。留学期間は短期が３ヶ月、長期が１年となっているが、１年留学した後も元の学年に戻って一緒に卒業できるので、生徒たちは安心して留学できるようである。その他、長期休業中に約２週間の語学研修を行っているが、こちらは気軽に参加できるため、対象者の中学３年から高校２年までの生徒が毎年多数参加している。語学研修で海外に興味を持って、留学に踏み切る生徒も数多く出ている。

② 海外留学生の受け入れと学習内容　海外からの留学生は13歳から17歳と年齢層が広い。また来日した生徒たちは、基本的に高校１年生か２年生のクラスに属する。（９月から１月までに来日したものは高校１年に、４月に来日したものは高校２年に属する。）

行事や授業参加が可能なホームルームや体育、美術、家庭科（一部）などにはクラスのメンバーとして参加する。その他英語の時間には、日本人生徒のために模範リーディングや表現のアドバイスをすることもある。基本的には日本語学習がメインであり、日本語検定の受検を目指した日本語のスキルアップと、１週間に１日は校外学習に出かけて日本語の実践学習や文化の学習をするという、充実した学校生活を送っている。（表３）

また、放課後は好きなクラブに所属して、学年を越えた交流を目白の生徒たちと行って

（表１） 海外姉妹校・提携校17校

	学校名
カナダ姉妹校	West Vancouver Secondary School, Sentinel Secondary School, Collingwood School, Rockridge Middle School, Delta Secondary School, Seaquam Secondary School, Don Mills Collegiate, Kings Edgehill School, York Mills Collegiate Institute, Halifax Grammar School （10校）
オーストラリア姉妹校	St.Aloysius College, Somervillle House, Ogilvie High School, Queenwood School （４校）
ニュージーランド姉妹校	Waitaki Girls' High School, Takapuna Grammar School（２校）
イギリス提携校、派遣のみ	Cobham Hall （１校）

（表２）　年度別交換留学生受け入れ人数　　（　）は派遣人数

年度	カナダ	オーストラリア	ニュージーランド	イギリス	年度別計
1990	1（6）				1（6）
1991	4（6）				4（6）
1992	3（8）				3（8）
1993	7（8）				7（8）
1994	6（7）				6（7）
1995	4（8）	8（8）	2（3）	0（8）	14（27）
1996	4（7）	8（8）	4（4）	0（2）	16（21）
1997	9（9）	7（5）	4（4）	0（0）	20（18）
1998	5（9）	2（6）	0（4）	0（2）	7（21）
1999	6（6）	8（8）	3（4）	0（2）	17（20）
2000	2（4）	6（8）	2（2）	0（4）	10（18）
2001	8（7）	6（2）	0（1）	0（0）	14（10）
2002	7（10）	6（6）	2（2）	0（3）	15（21）
2003	8（5）	4（5）	0（2）	0（1）	12（13）
2004	6（6）	6（6）	2（2）	0（5）	14（19）
2005	4（3）	3（3）	0（1）	0（0）	7（7）
2006	4（4）	0（0）	0（0）	0（2）	4（6）
2007	3（3）	2（2）	0（0）	0（1）	5（6）
2008	3（1）	3（3）	0（0）	0（0）	6（4）
総計	94（117）	69（70）	19（29）	0（30）	182（246）

いる。留学生はクラスやクラブに所属することによって、外国人という疎外感を感じることなく幅広い人間関係を築いて友人を得、日本人気質を少しずつ理解できるようになる。例えば「国際文化クラブ」では“もちつき大会”を行い、留学生の日本理解に一役買ったことがあった。また、合唱発表会ではクラス合唱のほかに、留学生一同が交換教員の外国人の先生とともにグループを作って特別出演し、外国と日本の歌を歌って拍手喝采を得たこともあった。その他、本校のチアリーディング部やバレーボール部、吹奏楽部などは何度か海外の学校を訪問している。逆に海外の学校の吹奏楽部や合唱部、修学旅行生も交流を深めに目白学園を訪れてきている。このような学校行事や同年代の友人を通しての交流は、何物にも替えがたいものである。

③　ホストファミリー制度　　留学生達は、日本ではホストファミリー方に逗留して通学している。留学は交換留学が基本なので、３ヶ月留学の場合、あちらの国でお世話になったご家庭のお嬢さんを自宅でお世話することになる。１年留学の場合は３～４ヶ月ごとにホストファミリーを移動するが、これはいろいろなお宅を経験することにより、より日本になじんでもらうためである。その場合は、ホストファミリーのみを希望するご家庭や、これまでにホストファミリーを経験していて受け入れを承諾してくださるご家庭にお願いしている。

留学に向けたPTAの組織としては、平成３年に「PTA国際交流委員会」が設立され、留学生・ホストファミリー・学校の三者の協力体制を支えている。また平成９年にはホストファミリー経験者の方々（在校生・卒業生のお宅を含む）が、「MOMの会（ホストファミリー経験者の会）」を設立し、現在に至っている。この会では、これから留学させるご家

（表３） ある年の留学生の時間割例（ＨＲ：高１）

	月	火	水	木	金
１時間目	Ｒ＆Ｗ（高２）	コンピューター（留学生のみ）	朝のＨＲ終了後、コンピューターでメール確認、その後、校外学習に出発。帰りのＨＲまでには学校に戻ってくる。	日本語	コンピューター
２時間目	日本語	Ｒ＆Ｗ（高２）		体育（高１）	美術（留学生のみ）
３時間目	家庭科（留学生のみ）	日本語		日本語	日本語
４時間目	家庭科（留学生のみ）	日本語		日本語	LHR（留学生のみ）
５時間目	コンピューター	日本語		日本語	音楽（留学生のみ）
６時間目	Speaking Out（高１）	校外学習の事前指導		書道（留学生のみ）	Speaking Out（高２）

庭の不安の解消や、留学生受け入れ時の心得や問題解決の手助けなど、交換留学に関するよろず相談を行っている。おかげで、新しくホストファミリーとなるご家庭にも、安心して留学生を受け入れていただいている。また、留学生のために「MOMの会」のお母様方は“浴衣着付け教室”や“雛祭り会”を行うなど、親身になって留学生をお世話してくださっている。このように目白学園ではホストファミリーと留学生との交わりが深く、そのことが交換留学制度を推進する力になっていると思われる。

④ 本校の国際理解教育　上記のような状況のもと、目白学園では国際理解教育をさらに充実させるため、全教科にわたって国際教育を浸透させる実践に取り組んできた。平成12年11月には、日本国際理解教育学会実践研究会目白学園大会が開かれた。（この研究会で家庭科では英語コースの高校２年生が、日本文化の「雛祭り・雛人形」についての研究発表を英語で行った。）これ以降、目白学園の国際理解教育は中学・高校を通して共通認識の下に、各教科の特色を生かし実践されることになり、より身近な存在となった。例えば、家庭科の研究授業では、「外国（英語圏）の料理を作って、レポートする」というテーマを取り上げ、ネイティブや情報科教員の協力のもと英語でプレゼンテーションするなど、国際理解教育は続けられている。

また平成16年に国際理解教育の分野で、実践的で優れた研究を継続している小・中・高等学校に対して授与される「馬場賞」が目白学園に贈られた。目白学園の行ってきた国際理解教育の方向性が第三者からも認められた証であり、自信を持って進んでいける礎となった出来事であった。

２．留学生と家庭科の関わり

（１） 留学生の指導計画

① 編成の特徴　日本と海外の学校のカリキュラムはかなり違っており、開設されている教科も異なる。そのような中、交換留学生達が留学を終えた後も留年することなく学校生活を続けるため、双方の学校が合意の下、留学中に学んだことを母校の単位として認める単位互換制を取り入れている。

本校には３ヶ月・１ヵ年留学の生徒が混在するので、それぞれにカリキュラムを組んで対応しているが、できる範囲で留学生同士が知り合えるようにも工夫されている。例えば音楽や家庭科、書道などの取り出し授業があり、この時間は１年・３ヶ月留学生が一緒に授業を受けている。（表３）このおかげで留学生相互の情報交換や助け合いができ、スムーズな学校生活・家庭生活が営める基盤ともなっている。日本人生徒との交流については１－（２）で説明したとおりである。これらのカリキュラムは国際教育部の留学生担当者が綿

密に計画を立てている。

② 留学生の日本語学習　留学の主な目的である日本語の習得については、主に週に８～９時間の日本語の時間や校外学習の時間を通して行われている。このカリキュラムの結果、日本語初心者であった３ヶ月留学の生徒が、留学終了時にはひらがな・カタカナを完全にマスターし、ジョークを交えたお別れの挨拶をスピーチできるまでになっている。１年留学の生徒については、多少の日本語知識のあった生徒ではあるが、留学終了時には日本語検定２級を取得し、滑らかな日本語でスピーチできるまでになったものもいる。

また、時間割にはコンピューターの時間が設定されている。この時間に生徒たちはE-メールを使って母校や家族・友人との交信を行い、母校の宿題や情報を得ることができ、帰国後の進路についても安心して留学生活を過ごすことができている。

（２） 家庭科授業

留学生の授業には、上記にあるように家庭科の時間がカリキュラムの中に含まれている。衣・食の面から日本を理解してもらうためである。そのための授業内容の詳細は、家庭科に任されることになった。そこで、日本人の授業の内容と学年を考慮して以下のような計画を立てた。

例えば、２学期に来日した生徒は高校１年生に属するので、配属された日本人のクラスメートと共に被服実習を行うことにした。また、３学期・１学期に来日する生徒には、取り出し授業という形で家庭科（調理実習と日本文化の学習）を取り入れた。これは、高校１年生の３学期、高校２年生の１学期の家庭科は講義形式のものがほとんどで日本語の内容が難しく、留学生が日本の生徒たちと一緒に学ぶことが難しいと判断したためである。

① 被服分野　被服実習は、簡単な日本語で説明ができ、また見本や試技ができ、日本人の生徒とのコミュニケーションが取れる場であると判断したので、合同の授業となった。日本人の高校２年生１学期の調理実習の時間は、同様の理由で２回ほどではあるが合同で授業を行った。

授業時間数は、各学期ともほぼ10回であった。外国の学校では、中学・高校において家庭科が選択科目であることが多いようである。（オーストラリアではさらに「料理」「お菓子作り」「裁縫」「木工」などというように細かく分かれているそうである。）そのような背景があるため、被服実習では初めてミシンに触るという生徒もいたが、課題としてはジャンパースカートやブラウス、甚平などを日本人学生と同様に扱った。（年度ごとに課題は異なったが、ミシンを使った１つの作品を仕上げることにしている。）特別に留学生用のテキストを作ることはなかったが、日本人用の図版つき説明書にルビをふって与え、“やって見せる”という方法で問題はなかった。１つのものを仕上げるということに留学生達は大変熱心に取り組み、自分の所属する日本人クラスの生徒たちと日本語と英語の混ざり合った会話で教え教えられ、互いに充実した時間が過ごせたようだった。作品も全員がしっかりと仕上げることができた。

② 食物分野　取り出し授業の家庭科では、基本的な日本料理と留学生のリクエストがあった日本料理を教えることにした。（巻き寿司・茶碗蒸し・雑煮・ぼたもち・お好み焼き・焼きそば・餃子　など　表４）こちらの授業は、ひらがなと英語の両方で説明したレシピを用意し、行事食（雑煮・ぼたもち　など）についてはそのいわれを英語で併記した。食材や切り方などについて積極的な質問が多く、留学生達の日本食に対する貪欲な知識欲を感じることができた。その中で面白かったのは、甘さについては割合と寛容な留学生達が油脂についてはとても敏感で、肉についている細かい脂肪まで包丁でこそげ落としていたことである。また食材では、タコとイカが総じて苦手らしく、お好み焼きには入れようとしなかった。お国柄がわかる出来事で、こちらも食習慣の違いをはじめ、いろいろと勉強させられた時間であった。感心したのはいずれの留学生も器用に箸を使っていたこと

（表４） 家庭科留学生（取り出し）授業計画例

	授業内容	知識
第１回	調 理 実 習：おむすび・味噌汁・即席漬け	和食の基礎①
第２回	ク ラ フ ト：箸置き・（ナフキンリング）・箸袋	箸とそのマナー
第３回	調 理 実 習：鶏の照り焼き・サラダ・春雨スープ・ごはん	和食の基礎②
第４回	日本の遊び：お手玉作り遊び：お手玉・ビー玉・おはじき	日本の遊び①・手芸
第５回	調 理 実 習：おはぎ・澄まし汁・菊花蕪	日本の行事（彼岸）
第６回	日本の遊び：折り紙・けん玉	日本の遊び②
第７回	調 理 実 習：お好み焼き・フルーツ寒天ゼリー	（留学生のリクエスト）
第８回	ク ラ フ ト：熨斗袋・水引き	日本の習慣
第９回	調 理 実 習：お汁粉・磯辺まき・昆布茶	日本の行事（正月）

で、これはホストファミリーの教えがかなり浸透していたようである。ホストファミリー方では様々な日本食を食べさせてもらったようで、日本と日本食への関心はかなり高揚していたと思われる。

③ 日本文化　日本文化の習得では、食や行事と遊びに関するものを取り上げた。（表４）食や行事に関するものとしては、簡単にできてすぐに使える箸置き・箸袋・熨斗袋の作成、遊びに関するものとしてはお手玉の作成と遊び・折り紙・おはじき・けん玉などを教え、共に遊んだ。（テキストは図と英語で作成した。）驚いたことに「折り紙」はかなり外国に広まっているようで、中には“ツル”や“かご”を折れる留学生もいた。母国における日本語の授業などで取り上げられたようだが、海外の異文化理解教育の一端が垣間見られた瞬間であった。

（３） クラブ活動（調理クラブ）

留学生達は、放課後好きなクラブに所属することができる。茶道部や華道部、ダンス部などに所属する生徒も多いが、調理クラブ（中・高生合同のクラブ）もなかなかの人気で、毎回何人かの留学生が所属する。こちらのほうは留学生の好みのメニューばかりを取り上げることは難しく、どちらかといえば洋菓子や洋食のことが多い。これらの時間の目的としては、日本人の友人を学年を超えてたくさん作ることと、日本語の会話に慣れることの方が大きかったと思われる。

レシピは日本人用のものとは別に、調理実習のときと同様にひらがなと英語両方で書いたものを用意した。グループは主に日本人高校生と合同で作り、留学経験者や英語コースの生徒がリーダーシップをとり一緒に実習をしてもらった。メニューは洋菓子や洋食が多かったが、留学生が作り方を知らなかったものも多く、大いに盛り上がって調理をしていた。また、出来栄えを留学生担当の教師に披露したり、他のグループと試食をし合ったりと、和やかで楽しい時間を過ごすことができていた。留学生によると、“日本の洋菓子は甘さが控えめでとてもヘルシー”だとのこと。共に時間を過ごした日本人生徒たちもいつもより笑顔が多く、中学生も留学生と交流する喜びを分かち合えたようで、互いに良い影響を及ぼすことができたプログラムであった。

（４） 留学生の活動の様子と感想

ここでは、さまざまな授業・クラブ活動の様子やその作品を、彼女たちの留学中の感想と合わせて紹介したい。彼女たちがいかに日本の生活・目白学園での生活を楽しみ、たくさんのことを学んでいたかがこれらからも伝わってくる。

Danielle・1992：何度か日本人と食事をしたあとで、日本人は一般に霜降りの肉や、分厚い脂のついた肉が好きだということに気がつきました。日本ではもし脂が気にならないなら、そのたびに肉から脂を除かずにいたほうが面倒でないと思いました。

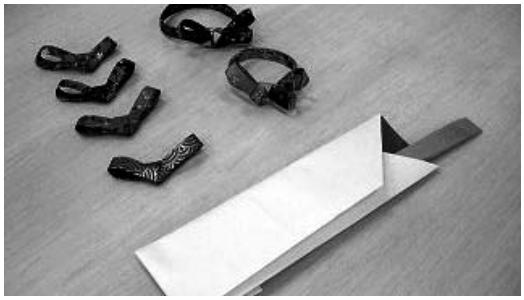

写真１　箸置き・ナフキンリング・箸袋

写真２　お手玉

写真３　浴衣を着て日舞の稽古

写真４　けんだま

写真５　調理部でお菓子作り(4)

写真６　折り紙(4)

写真７　書道(4)

写真８　茶道(4)

Nadine・1993：「日本のピザ、お好み焼きを食べよう」といわれたとき、生卵やみじん切りされた野菜、スライスされた肉を見て、とてもピザの材料ではないと思い、驚きました。友達の言うとおりに鉄板の上に広げて焼きました。おいしそうなにおいが焼けたことを知らせてくれ、友達がよくわからないブラウンソースを塗ってくれました。恐る恐る食べてみたら、おいしかったです。

Katie・1994：私はおすしが好きです。マグロを９皿も食べました。でも、生の蛸と、頭と目がくっついたまま揚げた魚はだめです。日本人は蛸やイカのような奇妙なものを食べます。こんにゃくのようなものは食べたことがありませんでした。どうしてもといわれれば食べられるけど、私は野菜のほうが好きです。しゃぶしゃぶとお好み焼きが好きです。

Alison・1995：西洋の文化は日本の文化から学ぶものがあると思います。特に、日本人は作るものすべてにプライドを持っているところがすごいです。料理の準備やフラワーアレンジメントにそれは現れていると思います。また普段から着物を着ている人を町で見かけましたが、すごいと思います。

Pam・1995：一番好きな時間は、日本人にとっては英語で私たちにとっては母国語の授業です。混成のクラスです。音楽と美術と家庭科も好きです。

Jocelyn・1995：日本語のほかには、家庭科が好きです。日本食はおいしいので大好きです。もう家に帰っても日本食が料理できます。

Hannah・1995：今までどうやったらにんじんを細かくできるか知らなかったです。シュレッダーにかけているのかと思ったら、日本人は何でも包丁を使っていてびっくりしました。

Michelle・1995：家庭科で箸置きを作りました。もっと折り紙をしたかったです。

Ursula・2000：なるべくならクラブに入ったほうがいいと思いました。日本の文化や日本語が学べるだけでなく、たくさんの日本人の友達ができるからです。ラクロスと茶道はおすすめです。

Vanessa・2002：日本の食品はユニークです。味やにおいはもちろん、見た目もいつも食べているものとは違います。今日、私はきれいなピンク色のスライスされた食品を見ました。てっきりハムだと思って、大きな口で食べたら・・・口から火が出ました。生姜のピクルスでした。

Lee・2002：母国とは違ったクラブがあって、楽しかったです。料理と裁縫と、ラクロスとチアリーディングが好きでした

Joanne・2006：日本食は本当に素敵です。その味を忘れることはできません。（納豆だけは別ですが。）みんな好きです。おかげで２キロも太ってしまいました。

３．留学生との関わりと日本人の家庭科授業

（１） 留学生指導と日本人の家庭科授業改善

留学生達はどんなことにも興味と関心を示し、新しい視点で日本を見ていた。日本の食事・文化・行事・はやりの音楽、ぎゅうぎゅう詰めの電車通学でさえ彼女たちにはおもしろいもののようであった。そんな彼女たちに日本のことを指導する立場になって、筆者自身、改めて日本のことを勉強し、「そんな行事があったのか」とか「そんないわれがあったのか」と認識を新たにすることが何度かあった。そして、「はたして今の日本人の生徒達が、日本人として知っておきたい日本の文化や習慣・行事について知っているのか、それを使いこなせるのか」という疑問がわいてきたのである。

日本の地理や歴史については義務教育で授業時間が決められていて、ある程度までは全ての日本人が知っている。ところが、文化や習慣・行事といったようなことは日常生活を通じて自然に身につけていくもので、そのレベルはそれこそ千差万別である。これから世界に日本を理解してもらい、活躍する日本人を育成するに当たっては、これらのことも一通り教えておくことが必要ではないだろうか。そう考えたとき、これらを教えやすいのは家庭科か総合学習の時

間ではないかと考えたのである。

ちなみに、現在の目白学園の中学生や高校生がどれくらい日本の習慣や行事・遊びについて知っているかのアンケートを行ってみた（中学１・２年生125名　高校３年生96名　2008年９月）。結果は表５に示した。家庭科の時間に学習したことについては、高校生の認知度は多少高かった。また、昔からの日本の遊びに関しては、全体的に見ると割合知っていることがわかった。しかし予測はしていたが、中高生とも大人からしてみると常識的な習慣を知らなかったり、昔は半ば強制的に行わされてきた行事を行っていなかったりすることには、驚かされるばかりである。その代わりとして、彼らはコンピューターや携帯電話を操る技術には長けているのであろうか。しかし情報モラルにはまったく疎いことは、もっと問題かも知れない。いずれにせよ、これらのことをきちんと伝えていない大人・家庭教育にも問題はあると思う。特に受験勉強や家庭での老人介護など、様々な理由で

（表５）　日本の文化や行事に関するアンケート結果（%）

番号	質問内容	中学１・２年生	高校３年生
1	お箸をきちんと持てる	80	83
2	お箸のマナーを知っている	81	96
3	普段の食事に箸置きを使う	12	8
4	和食の蓋のある食器の蓋の取り方を知っている	25	61
5	お箸で魚をきれいに食べることができる	55	63
6	お正月には初詣に行く	78	72
7	お正月にはおせち料理を食べる	87	83
8	おせち料理の中の黒豆・田作り・数の子の意味を知っている	15	25
9	お正月には雑煮を食べる	92	92
10	お正月に鏡餅を飾る	75	74
11	お正月に注連縄を飾る	58	44
12	１月７日には七草粥を食べる	55	49
13	お彼岸には墓参りに行く	65	60
14	お彼岸に牡丹餅やおはぎを食べる	50	41
15	子供の日に菖蒲湯に入る	33	29
16	お盆に迎え火・送り火・お供えをする	42	33
17	仲秋の名月にはお月見をする	19	10
18	冬至にはかぼちゃを食べる	65	46
19	冬至にはゆず湯に入る	64	57
20	大晦日には年越しそばを食べる	85	86
21	浴衣を自分で着られる	31	26
22	羽子板で遊んだことがある	72	81
23	凧揚げをしたことがある	80	86
24	おはじきで遊んだことがある	92	84
25	ビー玉で遊んだことがある	84	88
26	お手玉で遊んだことがある	95	98
27	福笑いで遊んだことがある	67	72
28	双六で遊んだことがある	96	91
29	こまで遊んだことがある	91	99
30	毬つきをしたことがある	38	50
31	あや取りをしたことがある	94	100
32	折り紙でツルやカゴを折ることができる	60	65

習慣や行事を削減していく傾向は年々強まってきているようだ。これらのことを考えるとき、今の日本の教育ひいては社会の状態では、どこにでもいる普通の人は育成できても、「日本人」の育成にはつながらないのではないかという危惧を感じるのである。

そこで、家庭科ではこのような状況を把握して、数年前から中学生に日本文化についての学習を始めている。

中学１年生　２学期の終わりにお正月やおせち料理・七草粥についてのいわれを学習し、七草粥を調理実習する。家庭でもお正月に七草粥を作るよう勧めている。

中学２年生　２学期に、箸使い・箸のマナー・和食のテーブルマナーを調べ学習し、自分で作った箸置き（和紙と牛乳パックで作る）を用いて実際に調理実習・試食を行い、和食で用いる食材の切り方や調理法を学ぶ。また、節分・彼岸など行事のいわれや、行事食の意味を学んでいる。

中学３年生　保育分野の‘子供と遊び’の単元で、日本古来の遊びや昔話について思い出したり、その効果を考えたりする時間を取っている。しかし知識として教える時間はあっても、それを実践したり体や手先を使って覚えたりする時間はほとんど無いのが残念である。

このような学習を展開してきた結果、知識としての日本文化は生徒達も多少なりとも身につけ、留学生と交流するときには話題の一つに取り上げたりしているようである。実際、今年度もオプションで２名の留学生が中学２年生の調理実習に参加したことがあったが（11月下旬）、その交流の中で日本の冬の食生活について話がでており（おせち料理、鍋料理など）、盛り上がっていた。目白学園中学校ACEプログラム（特別英語教育：対象はすべての中学生。ESLの手法を取り入れて週４～５時間の英語会話の時間を持っている。）がその目的の一つに掲げている、“積極的に英会話を使ってたくさんの人と交流しよう。まず自分のことを話して相手に理解してもらい、相手のことも聞いて理解しよう。”という国際理解教育の理念に、家庭科教育が貢献できた結果と喜んでいる。

しかし、子供達の手先の器用さは年を経るにつれ下降の一途をたどっており、今や縫い針やミシン針に糸を通せない生徒が続出している有様である。お手玉遊びは知っていてもそれで遊ぶことはできない生徒も多い。それを見るにつけ、知識にとどまることなく繰り返し体を使って体験し覚えることの重要性を痛感している。國吉ら（2008）[5]の報告では、小学校から高校までの「生活課題」「生活文化」に関わる家庭科授業の中で、“食物”領域については教育事例数も多く充実しているが、保育・被服・環境などの領域は少ないことが示されている。その傾向が、やはり本校の家庭科でも起こっていることが否めない。近年、家庭科の時間数は減少する傾向にあるが、“やってみて初めて本当にわかる”ことも多いはずである。目白学園の家庭科では今後も教える内容を精査し、知識プラス体験型の授業を行い、分野ごとのバランスも考えていきたいと思っている。

（２） 国際交流教育と家庭科授業

留学生との授業は、筆者にとって知識だけでなく、日本とはまったく違ったものの考え方をする人々との対応方法など、たくさんのことを学ぶ機会となった。留学生と日本人生徒の反応を見て、もちろん留学生だけの取り出し授業も大事だが、互いに参加する合同授業が及ぼす相乗効果の大きさに驚かされた。ジェームズ・Ａ・アダムスが述べている[6]ように「多文化教育がエスニック・マイノリティや異なる言語を持つ生徒だけでなく、主流の白人生徒にもかかわるもの」であり、「多文化カリキュラムは、参加型で、相互作用、個別化、協力を重視する教授戦略を持たなければならない」ことを、日本でも同様であると実感したのである。

ところで、昭和62年12月に教育課程審議会が出した答申は、「21世紀に向かって国際社会に生きる人間の育成」のために、１．豊かな心を持ってたくましく生きる人間の育成　２．自ら学ぶ意欲と、社会の変化に主体的に対応できる能力の育成　３．日本国民として必要とされる基礎的基本的な内容の重視と個性を生かす教育　４．国際理解を深め、わが国の文化と伝統

を尊重する態度の育成　を掲げている。そのなかでも、人間として必要なマナーやしつけ、自国の文化と伝統についてはもともと家庭での教育と学校教育が上手にコラボレーションして身につけていたと思われる事柄である。昨今の家庭事情を鑑みると、これらもますます学校教育に移行せざるを得ない状況になっている。

中西晃は国際化時代における学校教育のあり方で大事なことのひとつとして「日本人としての価値観とか、アイデンティティーを我々は持っていないといけない。日本の国の文化的な特質をよく知っているということ。あるいは、それを尊重するということ。これを土台として、他の文化との接触があったときに自他の文化をより深く知ることができる。」(7) と述べている。また、多田孝志は「具体的実践の場で学習効果を高めるのに重要なことは、何より子供たちに実感を持たせることである。…その具体的方法として　①生活につながる学習　②子供の心を揺さぶる学習　③地域に根ざした学習　④生活・生業文化に着目した学習　⑤同年代の子供の作品を活用した学習　⑥世界の現実の事象の教材による学習　⑦視聴覚機器や実物を活用した学習　⑧体験的活動を重視した学習　…これらを目的に応じて組み合わせることにより効果を高めていく」(8) と述べている。これらを実践することを考えると、衣食住や生活習慣・遊びを学ぶこと、料理を作るなどの体験学習を行っている家庭科の学校教育の中での役割は大きい。また留学生との合同授業は、実際の外国を知ることや心を揺さぶる学習につながるので、ますます必要になると考えられる。

４．今後に向けて

目白学園中学校・高等学校の行ってきた国際理解教育は、国際教育部を中心に進められている。留学生だけでなく日本人生徒についても、中学校のACEプログラムや高校英語コースを中心に、特に英語圏の国々の文化や習慣の学習を行い、留学生との交流を深めている。また、本校の国際理解教育は、海外帰国子女の受け入れをしていること、在日外国人が在籍していることから見ても、多文化教育が行われやすい環境にあり、それを上手に活用してきたといえよう。

しかし姉妹校が英語圏にしかないことから、どうしても中心が英語圏になってしまい、その他のアジア文化・アフリカ文化・イスラム文化などについては不十分であるのが実情である。これからの時代は中国・インド・アフリカの国々を知らずして渉っていけない時代になっていく。幸いにも同じキャンパスには目白大学があり、「中国語学科」「韓国語学科」「留学生別科」が設置されている。さらに、特にアジア圏からの留学生は多数おり、外国事情を知るには事欠かない環境である。その上、高大連携ということで高校生が大学の授業を聴きに行くことも許されている。今後、この利点を中学・高校のどのような時間にどのような形で取り込んでいくかは、学校全体として検討しなければならないことであるが、さらにグローバルな国際理解教育を今後は求めていく必要があろう。

また、前述したように昨今の教育事情を鑑みると、目白学園中学校の家庭科授業では日本の文化や習慣・遊びを取り入れているが、本来は小さいころから家庭や地域で身につけるべきものであるということを忘れてはならないと思う。前述の國吉らの報告(5) でも、生活文化に関する実践事例は高等学校と中学校が多く、小学校の事例が少なかったとあるが、できれば小学校卒業までにある程度は心身に浸み込ませてもらいたい事がたくさんある。「日本人としてのアイデンティティーを確固としたものにする」ためで、それに寄与する児童期の教育の重要性は計り知れないものがある。幸いにも来年度から目白大学には教員養成を主目的の一つとする“児童教育学科”が誕生するが、これからの世界を背負って立つ日本人を育てられる教育関係者が多数育ってくれることを、心から願っている。

《参考文献》

（1）「目白学園80年史」　目白学園80年史編纂委員会　平成17年　pp143-144
（2）森本治子「目白学園中学校・高等学校における異文化体験の実践的研究」目白大学短期大学

部研究紀要第40号　平成15年　pp151−152
（3）後藤倫子　森本治子「目白学園高等学校における交換留学生の日本語習得に関する考察」目白大学短期大学部研究紀要第44号　平成20年　pp220−222
（4）写真５・６・７・８はそれぞれ　目白学園発行「Mejiro Exchange」v.19, v.17, v.21, v.21　より抜粋
（5）國吉真哉　浅井玲子　伊波富久美　久保和津代　倉元綾子　立山ちづ子　福原美江　宮瀬美津子　桑畑美沙子「九州・沖縄の「生活課題」「生活文化」にかかわる家庭科の授業研究」　日本家庭科教育学会誌　vol.51−2　July 2008　pp99−101
（6）ジェームズ・Ａ・アダムス「多文化教育」サイマル出版会　1996年　pp36−38、188−189
（7）中西　晃・西村俊一「国際教育の創造」創友社　1990年　pp177-191
（8）全国海外子女教育国際理解教育研究協議会編著「地域に根ざした国際理解教育実践事例集」平成５年　pp17−19